

きつね火

むかし、大府村に八兵衛さんという、お酒の大好きなお百姓さんがいました。

ある日、八兵衛さんは、天神さまのお祭りがあるということで、長草村の親類の家にお呼ばれました。

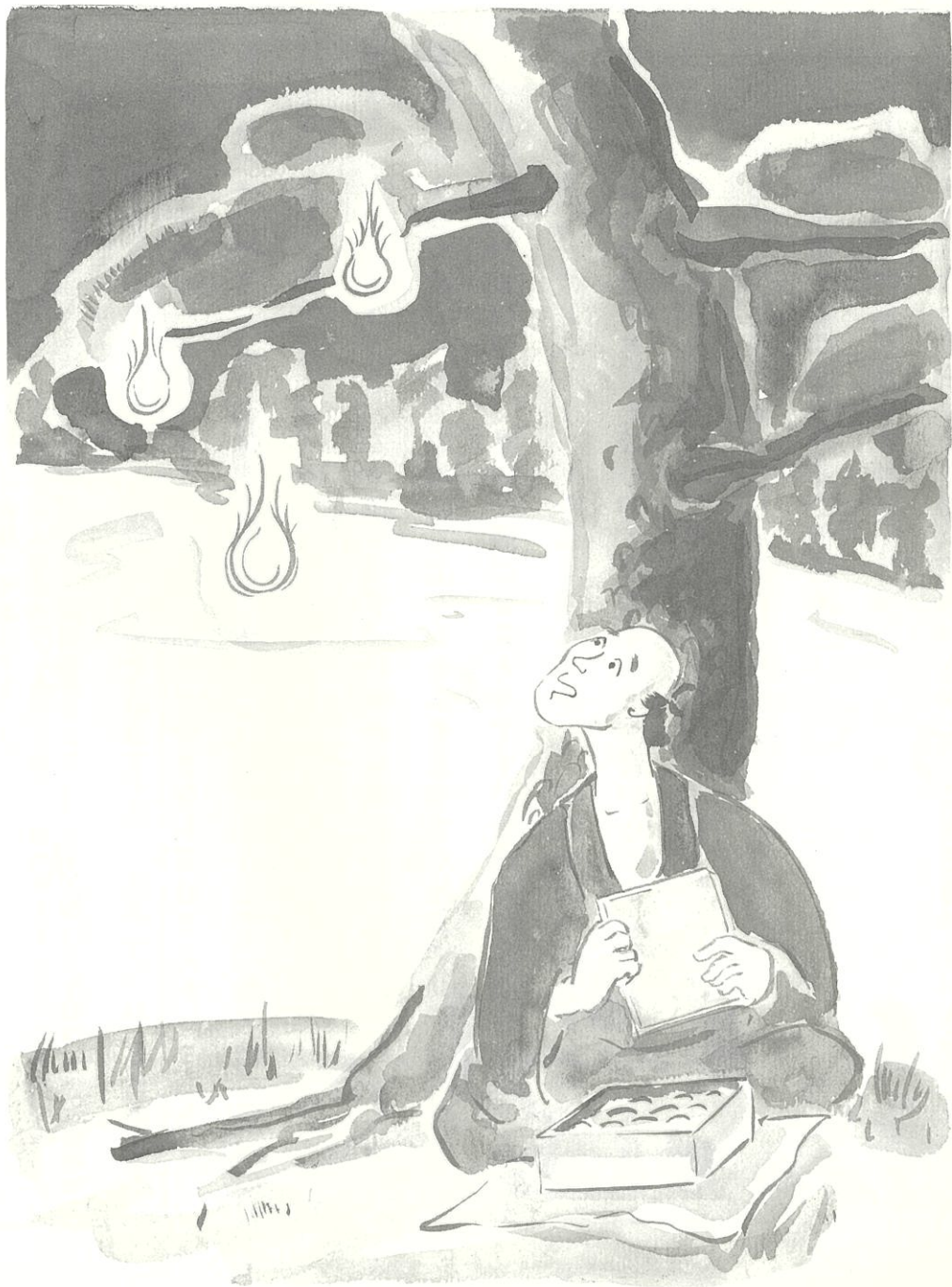
天神さまのお祭りは、どぶろく祭りです。神田から取れた米で、どぶろくをつくり、神前にお供えた後、お参りの人にどぶろくをふるまってくれます。そのお酒を飲むと、一年間病気をしないで、無事に過ごせるそうです。なにしろお酒好きな八兵衛さんのことです。そのどぶろくをたらふく飲んでから、親類の家へ行きました。

親類の家ではお祭りということで、ごちそうやお酒がたくさん出ました。八兵衛さんは、ここでも大好きなお酒ばかり飲んでいました。そのうちに、辺りはもう暗くなっていました。

「どれ、もうそろそろ、家に帰るとするか。」

八兵衛さんが、帰ろうとすると、

「お酒ばかり飲んでいて、あまり食べなかったから、これを持っていきな。」



と、親類の人が、すしのぎつしり入った重箱しゅうぼこをふろしきに包んで持たせてくれました。家に帰る途中、柗山びいらまにある池の近くまで来たとき、八兵衛さんはつかれたので、一休みすることにしました。八兵衛さんは、そばにあつた松まつの木の根元にこしをおろしました。

「お酒ばかりよばれていて、あまり食べなかつたなあ。どれ、あぶらげでもつまむことにするかな。」
（こちそうになつて） （いなりすし）

八兵衛さんは、ふろしきをとき、重箱に入っていたあぶらげを食べ始めました。食べながらふと池のほうを見ますと、何やら赤い物がふわふわ空中をただよっているではありませんか。

「あれは。」

「と思い、しばらく見とれていました。」

「そうだ。あれは、きつね火だ。きつね火にちがいない。」

正体がわかつてくると、八兵衛さんは、こわくなってきました。開けていた重箱をあわててしまおうとしたときです。何と、きつね火がものすごい勢いで、八兵衛さんの方に近づいてきました。八兵衛さんは、あまりのおそろしさに、その場で気を失つてしまいました。

しばらくして、八兵衛さんは、身ぶるいしながら目を覚さめました。

「ああ、よかった。何事もなかったようだ。」

といいながら、辺りを見回しますと、ぎつしりとあぶらげが入っていた重箱がからになっ
ていました。

「不思議なこともあるもんだ。」

八兵衛さんは、からの重箱をふろしきに包んで、とぼとぼと家に帰っていきました。

長草地区に伝わる話です。

大府町柊山は、むかし、柊の木がたくさん生えていたので、それが地名になったのです。

深夜、山のすそ野や中腹でちらちらと不思議な火が見える現象をきつね火といいます。一列に
つながって見えるのを「きつねの行列」、ジグザクになって見えるのを「きつねのよめ入り」と
呼んでいます。雨の降る日によく出るようですが、正体はよくわかっていません。きつね火は、
鬼火ともいわれています。